



Title	A Study on the Sustainability of Spatial Context and Living Function in the Historical Core Area of the Growing Indonesian Big City
Author(s)	Evawani, Ellisa
Citation	大阪大学, 1999, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/41369
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏名	エフアワニ Evawani	エリサ Ellisa
博士の専攻分野の名称	博士(工学)	
学位記番号	第14679号	
学位授与年月日	平成11年3月25日	
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 工学研究科環境工学専攻	
学位論文名	A Study on the Sustainability of Spatial Context and Living Function in the Historical Core Area of the Growing Indonesian Big City (成長下のインドネシア大都市における歴史的中心地区の空間的文脈および居住機能の持続性に関する研究)	
論文審査委員	(主査) 教授 鳴海 邦頃	
	(副査) 教授 笹田 剛史 助教授 加藤 晃規 助教授 草間 晴幸	

論文内容の要旨

本論文は、急成長下のインドネシア大都市における都心地区の環境整備方針の定立に資することを目的に、スマトラ島メダンを事例として、植民地時代に形成された歴史的中心地区の空間変容の実態およびその傾向を明らかにすることを通じて、歴史的中心地区の空間的文脈を保全しさらに居住機能を持続させるための環境整備の方法論を論じたもので、内容は序章および本文5章からなる。

序章では、本研究の背景、目的、意義および構成を述べている。

第1章では、19世紀末期に行われた初期の都市建設の過程およびその空間構成について分析している。まず文献資料の分析により、メダンが小集落から現在の大都市メダンの核へと発展してきた過程を明らかにし、さらに植民地時代末期の市街地の空間構成について、残存している環境実態をふまえて考察している。

第2章では、植民地時代に形成された歴史的中心地区の空間変容とその特徴について論じている。インドネシア独立直後の1950年代に作成された市街地地図と現状との比較分析を行い、大都市化や都市の近代化にもなう建築物の変容実態を把握し、これに基づいて土地利用の変容ならびに新たな都市景観の出現傾向について考察している。さらに建築物変容における形態と機能の関連性について分析している。

第3章では、歴史的中心地区の現在の景観的な特質を分析し、かつての植民都市としての空間的文脈が維持されているかどうかを考察するとともに、代表的な歴史的建築物に対する市民の認識、評価および保存に対する意識を意向調査に基づいて分析し、歴史的な都市景観を形成している代表的な歴史的建築物を人々がどのようにとらえ評価しているかについて考察している。

第4章では、歴史的中心地区における居住の実態とその将来的な可能性について論じている。まず、地区別の市街地形成過程および居住者特性を分析することを通じて、歴史的中心地区の多民族性・多文化性について考察し、さらにこれらの地区の主要な建築形式であるショッップハウスに着目し、居住者意向調査に基づき居住や事業の持続意向および住環境評価等について分析している。

第5章では、これに先立つ4つの章で得られた知見を取りまとるとともに、歴史的中心地区を、歴史的な空間文脈を継承しつつ、生活感にあふれた活力ある地区として持続させていく方途について考察している。

論文審査の結果の要旨

本論文は、植民都市を核に著しい成長を遂げているインドネシア大都市において、歴史的中心地区的環境整備計画の基礎を得ることを目指し、スマトラ島メダンを事例として、歴史的市街地の空間変容、歴史的都市遺産の保存に関する住民意向、および歴史的中心地区に特徴的な業務機能併存型住宅の居住実態および居住意向を分析した知見をまとめたものである。得られた結果を要約すると以下の通りである。

- (1) メダンの歴史的中心地区は、植民地時代に支配的地位にあったオランダ人の立場を反映して計画されており、主としてヨーロッパ系、インドネシア系、中国系の3つの民族の住み分けの構造がみられ、それぞれの地区は、そこに居住する民族の社会的立場を反映し、宅地の規模および形状、道路および街区形状等、地区の空間構成の点で相違があることを明らかにしている。特に、ヨーロッパ系住宅地区は、田園都市の概念によって計画されていることを明らかにしている。
- (2) 都市の成長にともない歴史的中心地区は中心業務地区の役割を担うに至っており、この間の建築物変容の実態分析によって建築物の変容傾向における形態と機能等との関連性を明らかにするとともに、建築物変容の地区的分布傾向から、地区が大きく保存エリア、変容エリア、新開発エリアに分かれ、とりわけ保存エリアは歴史的な建築物を核としながらネットワークを形成しており、植民地時代に形成された市街地の空間文脈の基本的な骨格が現在にも引き継がれていることを明らかにしている。
- (3) 23棟の代表的な歴史的建築物について、市民による認識・評価の程度を数量化III類を用いて分析することによって9つの建築タイプに分類し、保存意向がランドマーク的な建築物である5タイプ、11棟の建築物に対して高いことを明らかにしている。
- (4) 歴史的中心地区では、建築物変容の進展にもかかわらず住・商・業務機能が混在しており、とりわけ、業務機能併存型住宅（ショッップハウス）の存在が人口流出を食い止めていることを明らかにし、さらに、ショッップハウス居住者に対する意向調査によって、ショッップハウスでの継続居住意向および居住環境の改善意向を明らかにしている。
- (5) 大都市メダンの歴史的中心地区では、ネットワークを形成する保存エリアが存在しており、その核となる主要な歴史的建築物に対する住民の保存意向も高く、これらの歴史的建築物の整備を行うことによって歴史的な空間文脈を維持し、さらには、業務機能併存型住宅の質および周辺環境を住民の意向に沿って改善することによって居住機能ならびに職住近接性を維持することが、インドネシア大都市における歴史的中心地区の開発誘導および環境整備の有効な手法となりうることを示唆している。

以上のように、本論文は、植民都市を核に成長しつつあるインドネシア大都市の歴史的環境の変容特性や機能混在の実態、およびこれらに対する住民意向を明らかにするとともに、歴史的中心地区の空間的文脈および居住機能を持続させるための方策についてインドネシア大都市の状況に即した提案を行っており、環境工学の発展に寄与する所大である。よって本論文は博士論文として価値あるものと認める。